

日本文学研究必携 古典篇

日本文学協会編

岩波全書



日本文学研究必携 古典篇

日本文学協会編

岩波全書 243

日本文学研究必携 古典篇

岩波全書 243

1959年6月25日 第1刷発行 ©

1969年7月20日 第8刷発行

¥ 500

編 者 日 本 文 学 協 会

発 行 者 岩 波 雄 二 郎

東京都千代田区神田一ツ橋2ノ3

発 行 所 株式 岩 波 書 店
会社

落丁・乱丁本はお取替いたします

大日本法令 印刷・製本

凡 例

本書は日本文学研究者および大学等において日本文学を専攻しようとする人々のハンドブック、手引として編集したものである。

本書の各項目は、日本文学研究の各領域における研究史を整理して今日の学界が到達している水準を示すとともに、今後の研究の課題を明らかにしようとして執筆されている。

本書の構成は大別して、文芸学・和歌史・有職故実等の一般項目をふくむ前半の部分と、源氏物語・新古今集等の個別的項目をふくむ後半の部分とからなっている。前半の一般項目を特にもうけた理由は、特定の作品や作家についての分析を深めてゆくとともに、研究の方法論やジャンルや文学史の問題を追求してゆくこと、さらに歴史学・民俗学・思想史等の隣接科学の成果を吸収しそれを独自に綜合してゆくことが、日本文学研究の今後の発展のためにどうしても必要であると考えたからにほかならない。

したがって本書を利用される方は、個別研究の成果を知ろうとする場合でも、関連した一般項目（たとえば、古今集↓和歌史、平家物語↓語りもの、近世歌謡↓音楽史等）を参照されることが望ましい。そのために、巻末の索引を活用していただきたいと思う。

本書にかかげられた文献の記載例はつぎのとおりである。

一、明治以前の研究文献・資料は『』でかこみ、成立もしくは刊行の年を年号によって記し、活字本に翻印されているものはその旨を記した。(例、橘守部『難古事記伝』(天保13刊。橘守部全集)。仙覚『万葉集註釈』(文永6。万葉集叢書))

二、明治以降の単行の研究文献は『』でかこみ、初版の刊行年をそれぞれ明・大・昭の略号によって記した。(例、藤岡作太郎『国文学全史平安朝篇』(明38)。島津久基『対訳源氏物語講話』(六冊賢木まで昭5・25))

三、雑誌・講座・単行本に収録された論文は「」でかこみ、月刊誌は刊行年月のみを、月刊誌以外は巻号と年月を併記した。(例、志田義秀「日本民謡概論」(帝国文学明39・2359未完)。山田孝雄「日和考」(国語学二昭24・6))

四、類似した名称をもつ講座類は左のように区別し、またこれらの講座にかぎって刊年を省略した。

新潮日本文学講座↓『日本文学講座』(新潮社刊。初版十九冊、大正十五年・昭和三年。再版十五冊、

昭和六年・七年)

岩波講座日本文学↓『岩波講座日本文学』(岩波書店刊。二十函。昭和六年・八年)

改造日本文学講座↓『日本文学講座』(改造社刊。十七冊。昭和八年・十年)

河出日本文学講座↓『日本文学講座』(河出書房刊。八冊。昭和二十五年～二十六年)

岩波講座文学↓『岩波講座文学』(岩波書店刊。八冊。昭和二十八年～二十九年)

東大日本文学講座↓『日本文学講座』(東京大学出版会刊。七冊。昭和二十九年～三十年)

岩波講座日本文学史↓『岩波講座日本文学史』(十六函。昭和三十三年～三十四年)

五、主要な作家についてはその生没を西暦によって記した。

六、日本文学関係の雑誌はその数が多く、誌名も類似しているので、現在も刊行されているものにかぎって、巻末に発行所索引をもうけた。

なお、今日の学界では日を追って新しい成果が発表されつつある現状なので、本書に研究の現水準を反映してゆくため、適当な機会に増訂・改訂を加えてゆきたいと考えている。第三版には昭和三十七年までに刊行された参考文献を増補した。表題に*印のあるものは巻末頁参照のこと。

末筆ながら本書の作成になみなみでない尽力をいただいた執筆者各位と、岩波書店の方々
に厚くお礼を申しあげたい。

目次

凡例

文芸学	一
文献学 附書誌学	七
歴史学	一二
民俗学	三
比較文学	二六
和歌史	二九
演劇史	三五
物語小説史	三八
評論史	四六
俳諧史	五三
神道	五七

仏教……………六〇

儒教……………五三

民間信仰……………六七

語りもの……………七一

民話……………七五

民謡……………七七

神話……………八一

アイヌ文学……………八四

琉球文学……………八七

漢詩文……………九一

外国文学との交渉……………九六

国語史……………一〇三

美意識……………一二六

絵巻物……………一二九

音楽史……………一三三

風俗・有職故実……………一三九

古代文学	一三五
古事記 附記紀歌謠	一三七
風土記	一四三
祝 詞	一四七
神楽・催馬楽	一四九
万葉集	一五一
古今集	一六二
竹取物語	一六八
歌物語	一七一
宇津保物語・落窪物語	一七五
源氏物語	一七九
枕草子	一八八
日記文学	一九三
歌 合	一九七
私家集・私撰集	二〇〇
古代後期の物語	二〇三

今昔物語	二〇
大鏡附歴史物語	二五
梁塵秘抄	二七
古代における作者と読者	二九
中世文学	三三
西行	三五
新古今集	三八
方丈記	三三
平家物語 附保元・平治物語	三六
徒然草	四三
太平記	四六
能	四九
狂言	五七
連歌	六二
中世説話	六七
中世の物語小説	七一

幸若舞曲	二八〇
説経節	二八三
中世歌謡	二八六
五山文学	二九〇
中世における作者と読者	二九三
近世文学	二九六
仮名草子	二九八
西鶴	三〇一
秋成	三〇六
近世後期の小説	三一〇
貞門俳諧	三二六
談林俳諧	三三一
芭蕉附蕉門	三三六
蕉村・一茶	三三九
川柳	三四五
近世和歌	三四八

近世歌謡	三五一
人形浄瑠璃	三五五
近松	三六一
歌舞伎	三六八
南北・黙阿弥	三七四
国学	三七八
宣長	三八一
近世における作者と読者	三八五
人名索引	
書名索引	
事項索引	
雑誌発行所索引	

文 芸 学

最初に文芸学とは何かということが問題にならなくてはならないが、これが実は簡単に範圍をきめかねる面倒な問題であつて、いま仮りにそれを文芸学と文芸評論とどうちがうかという風にしぼってみても、毎月の雑誌を(あるいは新聞や週刊誌まで含めて)賑わしている時評的な、文学關係の評論や書評は多かれ少かれ、また直接か間接かに、文学の本質に関する何等かの見解を含んでいる限りにおいて広義の文芸学であることを妨げないのであつて、もしこれらの評論の分野にわたつてここで一々紹介したりまとめてみようとするならば、問題を列挙するだけで予定のスペースは尽きてしまう。そこで本稿では思い切つてそうした評論的一切を割愛し、もっと厳密な、そしてしたがって幾分アカデミックな意味で文芸(本稿ではことに日本の古典)を対象とする、ある体系的な科学が自覺されて以来、どのような問

題が方法論ないしその実践の上に採りあげられてきたかという点についてだけを考える外はない。

文芸学という語が、日本の古典文学を対象とする学として厳密にいつから始まったかという調査はなかなか面倒でもあり、またそれほど必要でもなさそうだが、石山徹郎によると、特に日本文芸学という名称は、昭和四年三月刊の氏の著『文芸学概説』中に使用したのが最初だろうといっているから、多分その頃から追々使用されるようになり、同十年前後には学界の慣用語として通用することになったものである。名称はとにかくとして、このように昭和の初期において、日本の古典文学を高度の文芸的作品として学問の対象と考へはじめたのは、ドイツの Literaturwissenschaft に直接、間接に影響されてのことであり、これはさらに溯れば明治二十年代から三十年代へかけて芳賀矢一等によってドイツのアカデミックな文献学(Philologie)が近世国学の基盤の上に移植され、一方これと並行してハルトマン以下のドイツ美学が、大塚保治、深田康算や下って大

西克礼などによって、東西の大学の講壇で着々紹介されて行ったことと無関係ではない。だから文芸学という用語の初見がいつどこと突きとめられることよりもっと大事なことは、日本古典を対象とする学問がこのように本来ドイツ文芸学の系譜を負うという事実を確認することである。現に当時、少くとも日本文芸学の代表者と目されていた岡崎義恵の見解はこうしたドイツ文芸学に負うところが多いといつてよく、岡崎にしたがえば、日本の文芸学の新しい進路を拓くために、学者がもっとも関心を持たなくてはならないものは、西欧諸国の文芸学中ドイツのそれであろうということであり、経験論的な英仏のそれとはこと変り、先行のドイツ文献学に対して起った同じくドイツの Literaturwissenschaft の中には豊かな成果を期待させるものがある、その或る物は鞏固な文献学的地盤の上に立ちつつ、文芸の最後のものを一挙にして掴み出さんとするかの如くに見える。「文芸学の進路」『日本文芸の様式』昭14所収)というのである。もっとも岡崎はこういったあ

とでずく日本の文芸学がドイツのその分派の如きものであってはならないことを弁じてはいるが(この意味のことは論文著書の随所でくりかえされている)、少くともその文芸学の進路が実際においてこのように直接にはドイツ文芸学へ傾き、間接には岡崎が「文芸の本質を確実に規定し得る基礎学」と考えている、心理学的、哲学的なドイツ美学に倚っていることは、たとえば、様式論的な諸論考、『日本芸術思潮』に属する諸卷ないし『文芸学概論』(昭26)その他によって明かである。だから岡崎の文芸学があんなにも派手に一世?を風靡したにもかかわらず、その後割合に学問的に発展を見ることができない現状に止まっているのも、実はいわゆる岡崎文芸学の系譜を溯った、本家のドイツ文芸学やドイツ美学がその責任の一半を負うべきかも知れないのだ。ドイツ文芸学に不案内な稿者はこの関係について一々確証して行く資格はないが、たとえば一九三〇年に出た E. Ermaninger の監修による Philosophie der Literaturwissenschaft や、またその頃のドイツ

文芸学派の機関誌だった *Deutsche Vierteljahrschrift für Literaturwissenschaft und Geistesgeschichte* などに収められている諸家の論文を拾い読みしたり、またその頃の翻訳や紹介で輪郭を知ることができたドイツ文学理論、たとえば マールホルツ (W. Mahholz) グンドルフ (Fr. Gundolf) シュトリッホ (Fr. Strich) コルフ (H. A. Korff) などに接したりして、半ば想像まじりに知り得ることは、この本家における文芸学もまた問題は普遍妥当な世界的関連性において捉えられながら、その実極めてドイツ的に思弁過剰の観念論ないしいわゆる精神科学だったということである*。

しかしながらそれにもかかわらずわれわれは岡崎文芸学の担う歴史的意義を見落してはならないであろう。すなわち岡崎義恵「日本文芸学の樹立について」(文学昭9・10)が発表された昭和九年代においてすら、いわゆる国文学界は釈義と考証と印象的な鑑賞の混淆した近世国文学の雑学性をまだ脱却してはいなかったことは何よりもこの論文が一番身近に感じ

ていたところであって、多少とも学問的自覚を持った当時の少壮国文学者達が、このような自分の所属する学問の世界の後進性をやりきれなく思ったのはあまりにも当然であろう。そうして彼等の前に何よりも大きな救いとなってあらわれた者こそ、よかれあしかれドイツ的な合法則性であり、純粹にあまりにも純粹に公式的原理的な何ものかではなかったか。岡崎文芸学が当時異常に新鮮な魅力として学界にヒットした理由は、少くともその有力な一つは、そこに学界そのものが渴望して止まないものが秘められているように思われたことによるのである。

もっとも岡崎文芸学が最初から学界の一部で批判されていた事実も見落してはならない。昭和九年から十年にかけて岡崎の文芸学樹立への意欲はもっとも旺盛であったし、これに対する学界の反響も大きく、したがって、たとえば雑誌「文学」においても昭和九年の十月と十年の二月と二回にわたって、「日本文芸学」の特輯号を出しているが、その顔触れを見ると、九年の方は、岡崎義恵、茅野蕭々、阿

部次郎、中島健蔵といった面々、十年の方は木村謹治、石山徹郎、神崎清、渡辺茂の諸氏であって、必ずしも日本文芸の専門学者とは限らず、一般西欧の文芸学者ないし評論者がこの問題に関心をよせていたことが分る。ところでこれらの人々の態度を見てみると、大体において、在来とかく文献学的傾斜を持っていた国文学の枠を突き破って生れてきたこの新興学の自覚や主張そのものに対しては一斉に同調的だったといえるが、さてあらわれた文芸学の内容に対しては必ずしも同調的だったとは限らないように、たとえば神崎清などは岡崎の文芸学が一方では世界的な文芸学を理論的に承認し、他方では、實際的に否定するという仕方で結局世界に背中を向けたいわゆる現実主義、日本中心主義にたどりつくことを指摘しているが、その他の執筆者も多少の程度においてこの新興の学に対して懐疑的であったように、阿部次郎「国文学と美学」にしてもその例外でなかったらしい。

しかしながら岡崎文芸学に正面きって対立したの

は石山徹郎であって、その見解を明かにするためには、その遺稿『芸文論』(昭²³)を読むに若くはない。本書は芸文論、文芸学批判、短歌俳句論の三部から成り、執筆の時期、掲載の雑誌機会等ずい分ばらばらだが、それにもかかわらず著者の科学的芸文観といったものはそれこそ科学的に組織されており、したがって部分的にその見解を切り取ってくることは不可能に近いが、ただ便宜的に石山が岡崎文芸学に對してどんなに對立的だったかという点だけをとりあげることは可能であろう。そしてこの問題は幸にして前記三部中の文芸学批判の部に集中的に扱われている観があるので、しばらくこれによって、どのように岡崎文芸学と對決したか極めて簡単にその跡をたどってみたい。

石山にしたがえば、日本文芸学とは「日本文芸を対象としてなされる科学的研究の一切を包括するものの意味」(『芸文論』九二頁)であり、その場合研究の対象である、日本文芸とは作品でなくてはならず、石山はこのような作品を「芸文」と呼んでいるので、

芸文研究こそは文芸学の中心でなくてはならないとする。石山の見解はここまでは岡崎と提携できる。ところが石山はここで岡崎と袂をわかつのであって、岡崎は芸文は観照によってのみ芸術として享受されるものであるから、文芸性とは観照性のまたの名でしかなく、文芸学とはそうした意味での文芸性の純粹な追究であるとするに対して、石山は岡崎のそのような文芸性を認めながらも、しかしどのような芸文であってもそれが人間の所産であり、人間のために存在することも疑えない事実である以上、芸文を岡崎のように人間生活との連関から切り離して、その芸術性、文芸性の側面からだけ眺めるということは芸文をそれだけ抽象化した見方であり、生きた芸文を殺してみるに斉しい。ところが芸文の作り手であり、それを自分のものとして持つ人間は抽象的な人間ではなくて、具体的なつまり歴史的に存在する人間、一定の時代に一定の社会の一員として存在する人間である。だからそうした人間生活から産出され、そうした人間生活のためのものとして持たれる

芸文に抽象的な文芸性などを考えることはできるはずはない。どのような人間でも具体的には歴史的社会的に規定されたものとしてしか存在しないように、どのような芸文でも、具体的には、歴史的社会的に規定されたものとしてしか存在しないとする。

石山はこのように岡崎文芸学を批判しながら、自己の文芸学を確立して行くのだが、その文芸学を支えるものは一言に尽せば芸文に対する歴史社会的認識であって、この点何よりも岡崎文芸学が「もののあはれ」「幽玄」などを様式論的に日本的な美の範疇として他の諸文化から切り離そうとしていることに対立する。石山によれば文芸は形象的な言語による世界認識であり、認識は要するに現実の反映に外ならない。この意味で文芸作品の究極的な内容はそれにおいて見られる世界観だといえる。ただ文芸が無条件的に世界観そのものであるとはいえないのであって、それはあくまでも文芸という形に担われた世界観であるとする。

以上岡崎義恵と石山徹郎についてあまりに多言を